「ドイツ教育」の現在 第3回

休暇と外国語教育にみる独自性

州レベル、学校レベルでの裁量幅が広いドイツ。学校の主体性、独自性を形づくっていくのは、教師自身にほかならない。

小野フェラー雅美
著述家・翻訳家　長野県松本市生まれ。1976年上智大学外国語学部ドイツ語学科卒業。82年、ドイツ・ハイデルベルク大学政治学科並びに言語学・ドイツ文学学科修士号取得。現在、ベルギッシュ・グラットバッハ市在住。日本とドイツとの文化交流の場で、幅広い活躍をしている。

州によって長期休暇をずらす

ドイツの学校の年間の休みは、一度に混まないように州ごとに時期をずらしてある。ケルンのあるノルトライン・ウェストファーレン州はドイツ中西部の州で、今年の休みは次のようになっている。

4月5日～17日（イースター）
7月22日～9月4日（夏）
10月18～30日（秋）
12月24日～1月7日（クリスマス）

カトリック教徒の多い、ドイツ南部の州バイエルンでは、それがまた違う。

2月23日～27日（イースター）
8月2日～9月13日（夏）
6月1日～12日（キリスト昇天の祝日）
11月2日～6日（秋）
12月24日～1月4日（クリスマス）

ベルリンの今年の夏休みは6月24日～8月7日だったので、6月25、26日頃、「休暇が始まったため、ベルリンから南の各アウトバーンでは渋滞中」という道路情報のアナウンスが何度も聞こえた。カレンダーを買うと、たいてい州ごとの学校休みの時期が記載してある。商談を計画してもその時期は家族ぐるみで3～4週間の休暇に入る可能性があり、相手がいなかったりするからだ。

だからといって、ノルトライン・ウェストファーレン州ではいつも8月が夏休み、というわけではない。それも毎年ずらしているので、同州でも7月や9月が主に夏休みになる年もある。10年先まで長期の休みは決まっているので（インターネットでそれぞれの州にアクセスして調べられる）、それに合わせて休暇の滞在先を予約したり、大きな旅行を計画したりする。

それに加えて、ノルトライン・ウェストファーレン州では、年間4日、それぞれの学校で決めてよい休日があり、各校の保護者会総会が多数決で決定する。たいてい木曜や火曜が祭日にあたるときに金曜や月曜を休日にし、まとめて休暇を取りやすくするのだが、そういう日の多い今年などは、同じ日、同じ町でも学校により非登校日だったりする。そのために、子どもたちが違う学校に通う家庭の場合はどちらも休暇をとれなかったりもする。

ところが面白いことに、それを利用して、同じ町の他校の授業に参加してみる生徒もいる。

撮影／津田孝二

ラテン語の授業。右側の女子が、500人が参加したラテン語世界大会で1位になったバーバラ・シェルハースさん。

そういう時は予め訪問先の学校の生徒（たいてい訪問生徒の友達）が校長に口頭で許可を得、当日の朝、訪問する生徒が校長に顔見せするだけでよい。また、外国の生徒が何週間、何か月も授業体験をしたいという場合も同じで、手続きはかなり簡単だ。もちろん、保険制度が整備されていることもあるが、これは校長の裁量部分に入るだろう。

休み中の登校日は、一切ない。教師も学校には一日も出ない。しかし、先月号にも書いたが、こちらのテストは白紙に何枚も書き込む形だ。採点には大分時間がかかるため、教科によっては、先生がテストペーパーを、休暇の仕事にする場合もある。そしてチロルの山中や南仏の海岸で、採点をする。ゆっくり休めるのは教師ばかりではなく、生徒もだ。週末には宿題を出してはいけないという規定1)があり、長期の休みにははっきりとした宿題はほぼ出ないため、長い休みをどのように使うかは一人ひとりに任される。

ただ、EU内の国に個人で語学研修に数週間行く生徒はかなりいる。特にやる気のある外国語教師などの人的関係で、イギリスやフランスなどに交換留学制度を持っている学校では、授業のある期間でも、数週間、数か月と、他国の学校で授業を受ける体制ができている。それ以外は、比較的安価でたくさんある語学研修専門の旅行社や個人のつてを使い、イースターの2週間の休みや夏休みに、習得した外国語を実際に使ってみる経験をする生徒は多い。

重要視される外国語学習

ここで、ドイツの中学相当のカリキュラム（これはラテン語！）の中で外国語の占める位置を見てみたい。

これも州や学校によってまったく違い、伝統的にフランス語に力を入れている学校や、英語が伝統の学校もある。それによって学校選びも行われる。ニコラウス・クザーヌス・ギムナジウムでの外国語選択は表1のようになっている。

表1

第一外国語（5年生、小5相当から）	第二外国語（7年生、中1相当から）	第三外国語または第三教科（9年生、中3相当から）
英語	ラテン語 フランス語 ギリシャ語 ロシア語	フランス語特別講座 ロシア語特別講座 ギリシャ語特別講座 スペイン語 イタリア語 ヘブライ語 生物・化学特別講座 物理・情報特別講座
ラテン語	英語	
フランス語	英語	ロシア語特別講座 ギリシャ語特別講座 スペイン語 イタリア語 ヘブライ語 生物化学特別講座 物理情報特別講座

入学前に生徒の希望が集められ、第一外国語によってクラスが決まる。話し言葉として使えないのに、なぜドイツでラテン語か？

ある意味では日本での漢文のようなものだ、と言っていいと思う。日本の学校での漢文は、日本史を含めた日本文化全般の基礎知識に関わってくる科目。日本の古典文献を研究する際にどうしても必要になってくるのと同じで、ラテン語はギリシャ語と並び西欧の大学における古典研究には欠かすことのできない言語である。また、ラテン語は分析的帰納的思考を促進し、

1）BASS：ノルトライン・ウェストファーレン州設定当局学校規定

問題解決は数学のような思考形態をとり、何千年の知の歴史を体現している。表1で分かるように、ラテン語は同州の必修科目ではない。だが、大学は学科によってはラテン語の終了試験を前提とするため、馬鹿にできない。私の修了したハイデルベルク大学では、ギムナジウムでそれを取っていなかったために、歴史学科履修のためのラテン語試験準備に一年半かかった学生がいた。ギムナジウムで取っておけば、医学でも何でも専攻でき、大学修了試験を受ける免許のひとつのようなものである。

ギムナジウムでの州の必修は第一と第二外国語で、それがどの外国語か、ということは定められていない。ニコラウス・クザーヌス・ギムナジウムがラテン語に力を入れているのは、学校自体にラテン語の伝統があるからだ。19世紀に、男子生徒のためのカトリックの私立進学校として創立された同校は、公立になってからもその伝統を受け継いでいるのだ。名前も、幅広い知識を持った、15世紀の哲学者、神学者、数学者であった枢機卿のニコラウス・クザーヌスに由来している。校長はラテン語の授業が大変上手と評判のリーゼンフェルト氏。

毎年、州、そして全国でのラテン語大会の勝者を輩出している同校にとって、今年は特にうれしい出来事があった。12年生のバーバラ・シェルハースが、ラテン語の世界大会で、お膝元のイタリアをはじめ、世界中から500人参加した高校生の中で1位になったからだ。中国古典のコンペで日本人が1位になるようなものだろうか。州大会もそうであるが、これは弁論大会でなく、自由作文、文法、筆記、口頭試験、自由弁論と、いくつもの分野での何日間にもわたる競争なのだ。バーバラは同窓生たちの評判もとてもよい、素直ではっきりした子だ。今、犯罪解剖学に興味を持っているという。

そういう先輩が同じ学校にいることがまた、後輩たちの励みになる。選択者が少なく、一時成立が危うくなったこともある同校のラテン語クラス。バーバラ効果か、今年の夏休み後の新入生では、ラテン語を第一外国語として立ち上がるクラスが三つあるという。

さて、これら外国語が全体のカリキュラムに占める割合はどのくらいだろうか？　表2が、ノルトライン・ウェストファーレン州の中学相当クラスの場合である[2]。

ここで注意しなければならないのは、第一外国語がギムナジウムでは5年生で週5～6時間、6年生で4～6時間学んでいる、という前提である。その2年間でかなり読解力もついているので、8年生では7年生から履修する第二外国語の方にウェートを置いている。

それが時間割になるとどうか？　同じくニコラウス・クザーヌス・ギムナジウムの、第一外国語が英語で、第二がラテン語、第三教科として生物・化学特別講座、そして宗教を取らず実践哲学を取った9年生の後期を見てみよう（表3）。前期に歴史の代りに地理があり、化学の代わりに生物があったクラスである。

表2

クラス	7年生（中1相当）	8年生（中2相当）	9年生（中3相当）
1週間の授業時間数	29～31	29～31	30～32
国語（ドイツ語）	4～5	4～5	3～4
社会科学*（歴史、地理、政治）	4～5	4～5	3～5
数学	4～5	3～4	3～4
自然科学**（生物、物理、化学）	2～3	4～5	5～6
第一外国語	4～5	3～4	3～4
第二外国語	4～5	4～5	3～4
美術、音楽	2～4	2～3	2～3
宗教、倫理、または実践哲学	2	2	2
体育	2～4	2～4	2～4
選択必修***			2～4
外国人生徒の母国語（追加授業として）	5	5	5

*歴史は6、7、9、10年生で、地理は5、7、9年生で、政治は6、8、10年生で履修。
**生物は5、7、8、9年生で、物理は6、8、10年生で、化学は7、9、10年生で履修。
***週3時間

表3

時間＼曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1時間目 7:50～8:35	歴史	物理	国語	生物化学	国語
2時間目 8:40～9:25	音楽	数学	物理	生物化学	数学
3時間目 9:40～10:25	化学	実践哲学	英語	体育	ラテン語
4時間目 10:30～11:15	英語	体育	ラテン語	体育	ラテン語
5時間目 11:35～12:20	生物化学	国語	数学	英語	化学
6時間目 12:25～13:10	実践哲学	英語	歴史	歴史	化学

2）ノルトライン・ウェストファーレン州文化省教育規定

幅広く、権限も強い校長の職務

ドイツでは、小学校以上の教師は大学で2教科を専門とし、2回の国家試験のあと、2教科を教える。先ほどのリーゼンフェルト校長はラテン語と歴史が専門。9月号に登場した英語のB氏は、体育が二つ目の教科。現在産休を取っている音楽のA先生は、数学が二つ目の教科。

学校は、インターネットや専門誌を通して、必要とする組み合わせを持つ教師を公募し、それに応募してきた教師たちが、書類審査、面接を通して採用される。教師の転勤は個人の希望による他はほとんどない。ちなみに、産休は、普通予定日の6週間前から産後8週間[3]。早産、双生児以上の場合は産後12週間まで。また、男性女性を問わず、生まれた子どもが3歳になるまで、勤務していた学校の職を失うことなく、「養育期間休暇」を取ることができる[4]。

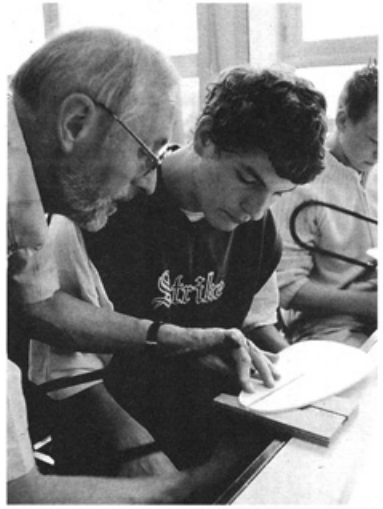
校長の仕事としては、普通教師より時間数は少ないが授業を継続するほか、生徒の学力評価の際の、それぞれの教師の評価の正当性の確認、各年度、各クラスの程度の把握もある。そのため、各クラス、学科ごとに行われるテストで、最も優秀と評価されたテストペーパーと、中間に位置するものと、そして最低点のものに目を通し、担当教師による評価が偏りなく行われているか、またそのクラス全体のその年度の程度などをつかむすべとする。

9月号で飲酒喫煙について書いたが、校内での指導にかかわらず校外で行ってしまうことについては、学校は警察からの注意を単に事実として受けるのみだ。暴力や麻薬は別だが、軽い飲酒や喫煙くらいでは普通校長室に呼ばれたりもしない。しかし、ハインリッヒ・ベル統合学校校長のクランプ氏は、5年生から10年生までは、学校の方針として、特に厳しく禁煙を守らせ、反した場合は保護者に手紙を送る、と言う。

また、文部科学省に相当する州の文化省の学科指導要領とは別に、各学校独自の指導要領がある。教員の創意工夫には大変余裕が与えられている。一例が、ニコラウス・クザーヌス・ギムナジウムの美術の授業。美術教師は、ケルン芸大でパーフォーマンス芸術家ボイスの弟子であったアルトマン氏。第二の専門は哲学であったが、当時の校長の裁量で特別に美術1教科のみを1968年から教えている。美術の指導要領には各学年1ページ程度で履修内容が書かれ、取材した9年生のページには、立体把握がテーマのひとつとして書かれている。取材した時、生徒たちはドリルや糸鋸を使って、卵の中に宇宙を創造していた。

文部科学省の大槻氏が学習指導要領の「基準性」について、「学校の裁量によって、学校や教員の創意工夫を生かした指導がさらに可能に」[5]と語っているが、同校の場合も、まさにそれだと思う。

美術の授業。アルトマン氏のように1教科のみを教える教師は例外的。



3）ノルトライン・ウェストファーレン州妊産婦保護規定
4）ノルトライン・ウェストファーレン州文化省養育期間休暇規定
5）「中学教育」2003年10月号、7ページ。